

室蘭工業大学-学報

NO.653



2023年度留学生交流推進懇談会及び留学生交流会を開催
(6ページに関連記事あり)

2024年 3月号

目 次

◇ トピックス ◇

AI・データサイエンス論文賞を本学学生が受賞……………	1
北海道若者活躍プロジェクトの事業成果報告書について……………	2
国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部（室蘭開建）との包括連携協定に関する 打合せを実施……………	3
第54回室蘭工大国際セミナーを開催……………	4
令和5年度合同業界研究会を開催……………	5
2023年度留学生交流推進懇談会及び留学生交流会を開催……………	6
空閑学長が皇居に招かれ「講書始の儀」を陪聴……………	7

◇ 情報・資料 ◇

MONOづくりみらい共創機構「プレ共同研究」（3回目）の採択……………	8
-------------------------------------	---

◇ 外部資金 ◇

民間等との共同研究の受入れ……………	9
受託研究等の受入れ……………	10
奨学寄附金の受入れ……………	11

◇ 寄 稿 ◇ ～ご退職にあたって～

「41年を顧みて」 「海岸工学に向き合った42年を振り返る」	もの創造系領域（創造工学科）教 授 溝口 光男…	12
「室蘭工大の思い出」 「まだまだ終わらない旅」	もの創造系領域（創造工学科）教 授 木村 克俊…	14
ひと文化系領域（理工学基礎教育センター）教 授 クラウゼ小野 マルギット…	もの創造系領域（創造工学科）教 授 河合 秀樹…	16
「本学での思い出」	しくみ解明系領域（システム理化学科）准教授 安居 光國…	18
		20

◇ 人 事 ◇

人事異動……………	22
-----------	----

◇ 学内会議 ◇

学内各種委員会等の開催……………	23
------------------	----

◇ 日 誌 ◇

学内行事・学外行事……………	24
----------------	----

トピックス

AI・データサイエンス論文賞を本学学生が受賞

本学大学院環境創生工学系専攻土木工学コースの渡辺修さんが、土木学会AI・データサイエンス論文集4巻(2023)において、「AI・データサイエンス論文賞」を受賞しました。本賞は、革新性・将来性・社会性に優れた論文として、2023年は計7号にわたる総数156件の論文のうち7件が選出され、そのうちの1件となります。

受賞者及び受賞研究題目は、以下のとおりです。

渡辺 修 (水防災・水環境工学研究室)
「アンサンブル予測雨量を機械学習法に導入したダム流入量予測の研究」

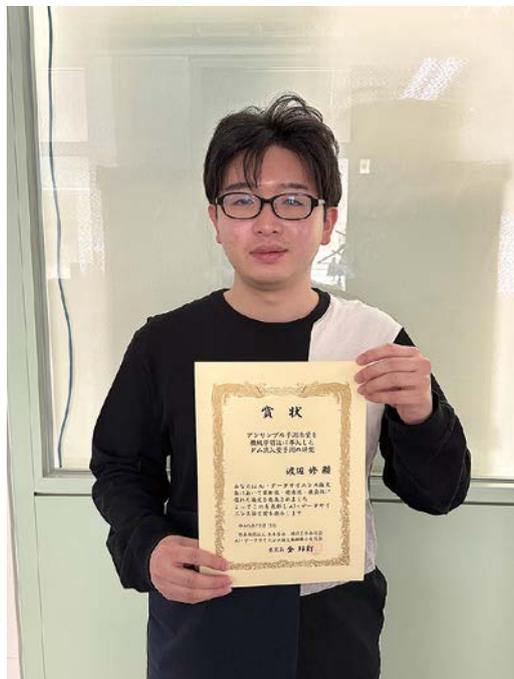
AI・データサイエンス論文賞、2023年12月15日
(共同研究者：中津川 誠、小林 洋介、若狭谷昇真)

本研究の目的は、アンサンブル予測雨量を用いることで、予測の不確実性を反映できるダム流入量の予測手法を提案することです。近年、全国的に頻発している大洪水に対して、効果的なダム操作に活かされる流入量予測

の精度向上が求められています。本研究では近年出水に見舞われている北海道のダムを対象に、スパースモデリング手法の一つであるElastic Netを使用し、流入量予測をおこないました。その際にモデルの入力変数に、アンサンブル予測雨量であるMEPS (Meso-scale Ensemble Prediction System)を導入しました。さらに、貯留関数法による予測結果との比較を行い、精度評価をおこないました。結果的に、Elastic NetにMEPSを導入することで治水上安全側の結果を与える予測が可能であることを示しました。

<受賞コメント>

論文作成には大変苦勞し、査読でも厳しい意見があったので、予想もしていませんでしたが、成果に社会的意義が認められたものとして大変うれしく思っています。これを励みに近年激甚化する水害の防災・減災に少しでも役立てられるように研究に取り組む所存です。あわせてこれまで育てていただいた両親、指導助言いただいた先生方や諸先輩に心より感謝いたします。



受賞した渡辺修さん

「北海道若者活躍プロジェクト」の事業成果報告書について

若者の地域就職を支援する文部科学省の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」を引き継ぎ、令和2年4月から令和5年3月まで実施した「北海道若者活躍プロジェクト」にかかる事業成果報告書をまとめましたので、お知らせします。

今後は、本プロジェクトで整備した、地域拠点を実行の中心とした地域特性に応じた自律的なプラットフォームを活用して、各地域拠点機関及び関係機関が地域教育及び地域定着事業をそれぞれの取組みとして実施します。

COC+の事業期間を含め7年間に亘り、北海道に貢献できる人材育成に関する教育から道内定着までを繋げるために、ご支援いただいた皆様に感謝申し上げますとともに、引き続き、各地域拠点機関の取組みにご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

リンク

[「北海道若者活躍プロジェクト」の事業成果報告書](#)

国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部（室蘭開建） との包括連携協定に関する打合せを実施

令和6年1月31日(水)、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部（室蘭開建）との包括連携協定に関する打合せを本学MONOづくりみらい共創機構会議室において開催しました。この打合せは、平成25年に包括連携協定の締結以降定期的に開催しております。打合せでは、令和5年度の実行内容及び令和6年度の災害訓練計画等について意見交換を行いました。

本学と室蘭開建は、平成25年12月に互いにこれまで構築してきた信頼関係と連携・協力の実績を基盤に、より緊密で組織的に行う体制の強化を図ることにより、安全・安心な地域づくりと胆振・日高地域の持続的発展に寄与することを目的に包括連携協力に関する協定を締結し、社会資本整備に関わる人材育成や学術振興の一層の促進、地域の活性化と安心・安全な社会基盤づくりに向けて、より効果的に貢献してまいります。また、平成29年1月には、被害の予防、軽減、拡大防止、迅速な避難、救助及び被災施設の早期復旧等を推進すること並びにこれによる地域への貢献に資することを目的として、災害時等の相互協力に関する協定を締結し、災害時における連携協力を進めています。



打ち合わせの様子

第54回室蘭工大国際セミナーを開催

令和6年2月8日(木)に第54回室蘭工大国際セミナーを開催しました。今回は、本学ひと文科系領域のクラウゼ小野 マルギット教授による「海外との人的交流はなぜ必要か ～室蘭流のさらなる国際交流展開を期待して～」という題目で講演を行いました。

講演では、ドイツと日本の文化の違いや、それをお互いに理解していくことの重要性、さらには今までの海外研修引率時の実体験をユーモアを交えて紹介いただき、参加した約50名の教職員、学生及び一般市民は興味深く聴き入っていました。

また本セミナーは、クラウゼ小野 マルギット教授の最終講義も兼ねており、講演の最後には花束と記念品が贈られ、セミナーは盛況のうちに終了しました。



講演を行うクラウゼ小野 マルギット教授

令和5年度合同業界研究会を開催

令和5年度合同業界研究会を令和5年11月11日(土)、12日(日)、令和6年2月13日(火)、14日(水)に開催しました。

本イベントは、就職を志望する学生が、各企業・業界の状況やインターンシップの重要性等について企業の担当者から直接説明を受け、自ら企業・業界研究を行うことにより各自の目指す業種や職種を考え、今後の就職活

動に資することを目的として行っています。

今回は、業界・業種等による採用活動時期の違いや学生の就職活動の動向等に基づき、11月と2月に分散した上で対面・ブース形式で開催し、企業369社、学生延べ約3,470名が参加しました。

参加した学生は、それぞれのブースで採用担当者から説明を受け、大変熱心に聞き入っていました。



2023年度留学生交流推進懇談会及び留学生交流会を開催

令和6年2月15日(木)にアールベルアンジェ室蘭において留学生交流推進懇談会及び留学生交流会を開催しました。

交流推進懇談会では、室蘭や登別の留学生支援団体等の出席のもと、本学の留学生受入れの取組みについて現状説明を行いました。その後、地域における留学生交流の推進について意見交換を行い、今後の交流事業に生かしていくこととしました。

交流推進懇談会終了後は、帰国・就職等で室蘭を離れる留学生の送別会も兼ねて、学長主催の留学生交流会を開催しました。この交流会には留学生、教職員等の学内

関係者の他に、地域の支援団体等の学外関係者合わせて約90名が出席しました。

交流会では、来賓代表挨拶として青山剛室蘭市長から卒業・修了留学生へお祝いのお言葉を頂戴し、その後、留学生による踊りや演奏などのパフォーマンスが披露され、和やかに交流の輪を広げるとともに、会場のあちこちで本学を去る留学生を囲み別れを惜しむ姿が見受けられました。

交流会の最後には記念撮影が行われ、大きな拍手のなか閉会となりました。



卒業生・修了生による挨拶



留学生によるバンド演奏



記念撮影

空閑学長が皇居に招かれ「講書始の儀」を陪聴

令和6年1月11日(木)、皇居正殿松の間にて行われた「講書始(こうしょはじめ)の儀」を空閑学長が陪聴しました。

「講書始の儀」とは、明治2年、明治天皇が学問奨励のために定められた「御講釈始(ごこうしゃくはじめ)」がそのはじまりとされ、毎年1月、天皇、皇后両陛下が人文科学・社会科学・自然科学の分野における第一人者から講義を受けられる儀式です。

空閑学長をはじめ、各界の著名人が招待され、両陛下に同席して講義を受けました。

なお、今年の進講者とテーマは、大阪大学の金水 敏名誉教授の「ことばのステレオタイプ “役割語” について」、東京大学の井上 正仁名誉教授の「捜査法の進化と課題」、千葉大学の西川 恵子名誉教授の「ゆらぎで探る物質の構造」でした。



MONOづくりみらい共創機構「プレ共同研究」(3回目)の採択

令和5年度MONOづくりみらい共創機構プレ共同研究(3回目)公募の結果、次のとおり採択されました。

本事業は、本学教員と民間機関等との研究者が、次年度以降において民間機関等との共同研究へ発展させるための前段階に相当する共同研究に対して助成を行うものです。

研究代表者・職・氏名	民間企業等	採択金額 (千円)
もの創造系領域 准教授 栗原浩平	特定非営利活動法人 公共環境研究機構	500
しくみ解明系領域 准教授 馬渡康輝	(株)マテック	500
合 計 (2件)		1,000

外部資金

民間等との共同研究の受入れ

研究代表者・職・氏名	相手方区分	金額 (千円)
もの創造系領域 准教授 中 田 大 将	大 企 業	757
もの創造系領域 准教授 湊 亮二郎	中 小 企 業	800
合 計 (2 件)		1,557

※大企業・中小企業の別は、中小企業基本法（昭和38年法律第154号）第2条による。

受託研究等の受入れ

研究代表者・職・氏名	委託先区分	金額 (千円)
しくみ解明系領域 教授 太田 香	独立行政法人	1,950
合 計 (1件)		1,950

奨学寄附金の受入れ

寄 附 者	目 的	金 額 (千円)
公益財団法人能村膜構造技術振興財団	工 学 研 究 助 成	2,000
新栄クリエイト株式会社	工 学 教 育 助 成	50
一般財団法人北海道道路管理技術センター	寄 附 講 座	4,000
株式会社ドーコン	寄 附 講 座	2,000
北海道道路エンジニアリング株式会社	寄 附 講 座	2,000
株式会社砂子組	寄 附 講 座	2,000
株式会社構研エンジニアリング	寄 附 講 座	2,000
ニューデジタルケーブル株式会社	寄 附 講 座	1,000
株式会社アクアジオテクノ	寄 附 講 座	1,000
岩田地崎建設株式会社	寄 附 講 座	2,000
大日本ダイヤコンサルタント株式会社	寄 附 講 座	2,000
特定非営利活動法人 地下資源イノベーションネットワーク	寄 附 講 座	2,000
株式会社ドーコン	工 学 研 究 助 成	300
新東工業株式会社	工 学 研 究 助 成	2,000
個人寄附者（1件）	工 学 教 育 助 成	10
個人寄附者（1件）	工 学 研 究 助 成	658
合 計（16件）		25,018

41年を顧みて



もの創造系領域（創造工学科）
教授 溝口光男

私は1983（S58）年4月、本学修士課程修了後すぐに建築工学科の助手に採用され、建築構造工学講座に所属しました。それから41年間、建築構造分野の教育・研究を担当させていただき、後半では大学運営にも携わらせていただきました。きっかけは、後に学長となられる指導教員の荒川卓教授からいただいたお誘いであり、折角の機会なのでチャレンジし、もし研究者に向いていないときは転職しようと考えておりました。最近、株価が史上最高値更新のニュースとして取り上げられるバブル経済とその破綻、続く就職氷河期を過ごすうち、転職することも忘れこのように長く勤めさせていただくこととなりました。

ここでは、41年間でかかわりのあった主なできごとを顧みたいと思います。

助手になった頃の大学は、朝から夜中まで誰かが講座にいる不夜城と化し、ときには徹夜や寝泊まりする学生がいる、そんな時代でした。春は新歓コンパで夜中に寮式挨拶があちらこちらから聞こえ、今ではアルハラに当たるお酒の飲み方が当たり前に行われていたように思います。当時、100名を超える教職員が会員の職員テニス同好会があり、入会してテニスを始めました。この同好会は教員と職員の区別なく、役職も上から下までさまざまな方が参加されており、さまざまな情報に触れるとてありがたい機会でした。土曜日は半ドンで、天気良ければ午後にはテニスに誘われるというような生活を送りつつ、小講座制のため助手が自由に使える研究費はな

く、研究成果は小講座の環境しだいのところがあり私は恵まれていたと思います。

1990（H2）年4月、学部・大学院改組により、区分制大学院博士後期課程が設置され、助手であっても博士の学位が要求されるようになりました。大講座制のため研究費の管理が教員個人単位となり、助手にも少しの研究費（確か30万円くらい）が配分されるようになりました。科研費を常時獲得すれば問題ないですが、なかなか難しく、私は同じ分野の荒井康幸教授と共同で研究を進めさせていただいたので、1999年3月に本学から論文博士を授与していただくことができました。

世の中では、1982年にNECがパソコンPC-9801を発売（価格は298,000円）し、N88-BASIC（86）でプログラムが組めるようになりました。パソコンの急速な普及とともに、実験機器・装置もデジタル化が進み、実験室の加力・計測装置のパソコンによるオンライン化を国内でもかなり早い段階で実現しました。また、論文作成では、手書きから、ワープロソフトや表計算ソフトの利用へ変化し、1990年代にはWordとExcelが主流となり、発表方法もOHPから1990年代半ばにPowerPointなどのプレゼンテーションソフトウェアに置き換わりました。現在当たり前前に利用しているインターネットの登場は1990年頃だったでしょうか。学内ネットワークが構築され、有志により作成された説明書を基にしてトラブルながらも研究室のLANを自力で構成・接続設定しました。

2000年10月に助教授昇任となりました。この頃は、

1991年の大学設置基準の大綱化以降の大学改革の真っ最中で、教育システム委員会にいろいろなWGを作り、授業評価アンケートやシラバス作成などの整備が行われていました。シラバス記入例などに、私が原案として提案したものが今でも使われており、懐かしく思います。また、準備が整った学科からJABEE審査を受けることとなり、必要な技術者倫理教育について特色GPを獲得して学内教員有志で議論し、現在のオムニバス形式での実施につながることとなりました。

2004年4月に国立大学は法人化され、6年一区切りの中期計画・中期目標とその達成評価、大学としての認証評価が導入されました。私はその2年半後の2006年10月に教授に昇任となりました。建築JABEEについて2008年受審6年認定獲得したことが教授としての最初の仕事となりました。2009年に学部・大学院改組（建設システム工学科・専攻が建築社会基盤系学科・専攻へ）、2014年に大学院改組（建築社会基盤系専攻から環境創生工学系専攻へ）があり、それぞれコース長、学科長・専攻長として取り組みました。また、2011年4月から4年間、学科長・専攻長、領域長、DCコース長とともに評価分析室の室員をさせていただき、年度評価を初めとした各種の評価に携わりました。結構危ない昭和的な勤務時間を経験してしまいました。

2015年4月から副学長（教育担当）、2017年7月から理事（学術担当）・副学長をさせていただきました。第三期中期計画・中期目標（期間2016.4-2022.3）の作成に携わり、学士修士（当初は6年一貫）教育プログラムの立案と実施、理工学部改組に取り組み、地方創生としてのCOC+の教育にかかわりました。また、2020年3月には新型コロナウイルス感染症感染対策がありました。学位記授与式、入学宣誓式の中止、遠隔授業導入や入試対応など、すべての教員の多大なるご協力と事務担当部署の献身的な貢献があって無事乗り越えることができました。改めて皆様に感謝申し上げます。

本部庁舎から夜にD棟研究室へ戻り、それから教育・研究に取り組んでおりました。手は抜いていないつもりではあったものの十分な対応ができたのかはわかりません。やってみてダメなら変えよう、折角やるならインパクトのあるものを入れたいとの思いで対応した6年間だったように思います。良いものは残り、ダメなものは淘汰されていくはずなので、さまざまなことにかかわ

た者として今後の変化を楽しみたいと思います。

教職員の皆様には長きにわたりご指導ご鞭撻をいただき心より感謝申し上げます。また、講座や研究室に所属してくれた卒業生・修了生の皆様のご協力・ご支援に対し心より御礼申し上げます。

最後に、皆様のご健康と室蘭工業大学の益々のご発展をお祈りいたします。本当にありがとうございました。

海岸工学に向き合った42年間を振り返る



もの創造系領域（創造工学科）
教授 木村克俊

私は1982年に大学卒業後、最初の18年間に国立研究機関で、その後の24年間に室蘭工業大学で勤務し、2024年3月をもって定年退職を迎えます。この間、一貫して海岸工学に関する研究に従事することができました。ここでは私の42年間の研究生活を振り返りたいと思います。

大学4年の夏に国家公務員試験を受験し、首尾よく合格したので、卒業後は社会インフラや防災施設の整備に携わる技術者になりたいと考えておりました。私の曾祖父は屯田兵として北海道に入植し、自分はその4代目に当たることから、北海道開拓使の流れをくむ北海道開発庁に就職することには全く違和感がありませんでした。大学での卒業研究は土質工学を選び、できれば道路の技術者になりたいと思い、採用面接でも道路希望と伝えていました。ところが配属先は港湾となり、初任地は札幌にある土木試験所と告げられ、正直がっかりしました。もともと水理学は苦手でしたし、海のない旭川で高校まで過ごしたので、港湾の仕事にはあまり関心がありませんでした。このような訳で、希望とは異なる形で海岸工学の研究を始めることになりました。

土木試験所は、北海道開発局からの要請で実務に即した試験研究を行う機関でした。私には水理模型実験の経験が全く無かったため、先輩に手取り足取り教えて頂き、何とか自分の役割をこなすことができました。そして2年間で過ぎ、仕事にも慣れたので結婚しようと思い、札幌市内の公務員宿舎を借りる手続きをしていたところ、神奈川県横須賀市にある運輸省港湾技術研究所への出向

を命じられました。

港湾技術研究所は、海岸工学に関する幅広い研究を行っており、私が所属した防波堤研究室のほか、波浪研究室、漂砂研究室、水理研究室、海洋汚染研究室、海象観測研究室があり、それぞれに大学卒の若い研究員が配属され、切磋琢磨しておりました。研究面ではライバルでしたが、仕事以外での交流の機会が多く、長く付き合いが続く友を得ることができました。港湾技術研究所には6年間在籍しましたが、最後の年には職員組合の書記長を任され、働きやすい職場づくりに取り組みました。

卒業後9年目に北海道開発局に戻り、1年間だけ小樽港湾建設事務所の計画課長を務めました。この事務所の初代所長である廣井勇博士は、室蘭工大のルーツである札幌農学校の第2期生です。廣井博士が指揮した防波堤工事についての調査業務を担当する中で、防波堤の設計公式である広井式やコンクリート材料試験について知ることができ、以降の研究にも大変に役立ちました。

その後、初任地である土木試験所（名称は開発土木研究所に変更）に戻り9年間、北海道内の港湾に関する試験研究を行いました。33歳のときに科学技術庁の留学制度に応募して、世界最大級の実験施設を有するドイツのハノーバー大学で1年間在外研究をしました。受入れ先であるフランチウス水理研究所のウーメラシ教授はEUの海岸工学委員会の中心的存在で、欧州の海岸工学研究者が集まる会議を定期的開催しておりました。私もこ

の会議にたびたび同席させて頂き、多くの研究者と知り合うことができました。ドイツには妻と小学2年の長女、幼稚園年長の次女の家族4人で滞在しました。ハノーバー市には日本人学校がなかったため、二人の娘は現地の小学校と幼稚園に通わせました。このため子供たちを通じてドイツ社会に溶け込むことができ、とても充実した1年間となりました。

40歳で研究室長となったとき、室蘭工大で海岸工学分野の助教授を公募していることを知りました。それまでに3年間、札幌市内の私立大学で非常勤講師として港湾工学を教える中で、若い世代の人たちと接する仕事に魅力を感じるようになりました。実験施設や研究予算に恵まれた国立研究機関から離れることに迷いがありましたが、教育という仕事に挑戦したいという思いが強まり、2000年4月に本学に参りました。

大学に来てからは、新たに海岸近くの道路や鉄道の研究を始めました。当時、えりも岬の黄金道路は越波による通行止めが頻発し、室蘭開発建設部から対策について相談を受けました。学生と一緒に何度も現場を訪れて越波の様子をビデオ撮影し、それを水理模型実験で再現して最適な解決策を見つけることを繰り返しました。また海岸鉄道についても課題が多く、とくに廃線となったJR北海道の日高本線は主たる研究対象となりました。

土木工学分野では技術士が非常に重要な資格であることから、その1次試験が免除となるJABEEには土木工学コースとして積極的に取り組んできました。2002年頃、JABEE受審の準備を進める中で「教員も技術士を取得しよう」ということになり、のちに北大に移られた田村亨先生と一緒に技術士2次試験の受験勉強に取り組みました。努力の甲斐あって、2003年に建設部門の港湾および空港分野、2006年には総合技術監理部門の技術士資格を取得し、本学の水元技術士会のお手伝いをすることができました。これから社会に出る学生諸君も、若いうちにこうした資格取得に挑戦することをお勧めします。

2010年頃からは、海岸コンクリート構造物の波浪による摩耗の問題に取り組みました。そのきっかけは海岸擁壁の前に設置された消波ブロックが5年ほどで消失したとの報告を受けたことでした。消波ブロックの残骸の近くには直径30cmくらいの鏡餅のような石があり、その動きを調べることでコンクリートの摩耗メカニズムを解明することができました。

大学卒業からこれまでの42年間、海岸工学という1つのテーマに取り組むことができたことはたいへん幸せでした。その間、私の研究のための実験や現地調査を支えてくれた皆様に対しまして、心より御礼を申し上げ、筆を置くことにいたします。

室蘭工大の思い出



もの創造系領域（創造工学科）
教授 河合 秀 樹

このたび、約27年間の室蘭工大教員生活を終え定年退職を迎えることになりました。それまでの民間の化学会社での研究生生活を重ねると教育研究職に40年以上在籍することになり、また阪神大震災を経験した私を拾って頂いた室蘭工大への恩を思うと、哀惜の念に駆られます。当時機械システム工学科の私の周りのお歴々では、高橋、田頭、藤原、杉山、花岡、疋田、岸浪、臺丸谷、媚山、戸倉、各先生などが名を連ね、若い先生では新井、小林、相津、風間、花島、長船、湯浅、鈴木、の各先生など、新進気鋭の方々が活躍されていました。これまでの汗だく3K現場から離れて初めて大学の学者先生方と深く付き合わせて頂くことになり、わくわくしたものです。皆さんちょっと癖はあるものの、やはり大学の先生はずば抜けて頭がよく、その構造が違うことを目の当たりにする強烈な記憶が脳裏にあります。その後も「このような人たちが学問、学術の風（かぜ）の中で過ごすところなんだ」と言う、世俗とはよい意味で違う風をいつもこの大学から受けとることができました。このチャンスは千載一遇と言うべきものだったと思います。前職の研究所長の口癖が、「大学との共同研究で、実現できないからと言って先生や先生のアイデアを罵り、大学のせいにしてこき使おうとするんじゃない。実用化に結びつけるのは、我々企業の仕事だ。」とよく言われました。この言葉を胸に大学学術文化を壊してはならないと言う気概は持っていました。今つくづく、先哲の思いが蘇ります。このような二つの素晴らしい職場に縁を頂き、朱に交わって私も一流に成長できたのかと思いきや、そこ

だけはまったく無残な結果を再認識しています。

ところで、大学に来て機械工学と電気電子工学の教育分野には「夜間主コース」があることを知ることになりました。当初どの先生も「ちょっと夜講義するだけだから」と言われていましたが、聞くと見るとは大きく異なり、学生文化はそれぞれ別であり、悩みの内容もかなり違って、これは大変だと思いました。それをあるOB飲み会の席でちょっと愚痴ったら、「先生、私は夜間主出身だよ。僕ら夜間主は電気電子も含めて室蘭の工業地帯を支えている自負がある。しっかり教育してくれよ。いい学生育ててくれたら、就職は俺たちに任せとけ。」と言われ、はっと気づかされると同時に自分を恥じました。それ以降、夜間主教育も特に初年次教育が肝要と、活躍しているOBを呼んで講義してもらったり、4力の重要性を説いたり、自分なりに注力して来ました。夜間主は小規模でまとまっているせいか、それとも初年次の先輩講演との縁を大切にしてくれているのか、強い絆があり、不思議と4年次の研究室配属において昼間コースの学生と融合した後も、かなり仲良く、下手すればリーダー格になるものも少なくなく、私なりにこのやり方を続けて来てOBの先輩たちも喜んでくれているかなと思った次第です。

空閑学長先生の時代には執行部の経験もさせて頂き、役員会では隣が岸浪監事でしたので、いつも大学の研究戦略を説いて頂きました。その根底には「LowテクのHighテク化」があって、「1スパイラル回って技術は少しだけ進化する。それが大事。アメリカはそのスパイラ

ル半径が小さくて回転速度も速い。片やロシアは回転半径が大きくて回転速度もゆるやか。でもどっちもいい勝負する。」と言われていました。どちらに優劣があるものでもなく、両方ともが本質で、エンジニアリングはその時間軸の采配が大事と言うことかと思った次第です。岸浪先生だけでなく、馬場先生、船水先生にも社会連携による大学の研究について、示唆に富むお話を頂いたことも私にとってはかけがえのない経験になりました。

いろんな思い出が走馬灯のように駆け巡りますが、中でも特に大きな出来事と言えば、JABEEもちろんそうですが、空閑学長指導の下、室蘭工大がこれまでの工学部から理工学部に大きく変身したことです。中でも、女性がこれまでのような名門女子大に憧れるのではなく、理系女子に方向転換する大きな波がこれほど早く来るとは、正直私は思いも寄らず未だに信じられません。これからの工学部、理工学部の需要は国の安全保障にも関連して、ますます増えると思われ、文系大学が続々と情報系、食品、栄養学系を中心に理工化へと変貌する可能性もあって、優秀な先生を取られることも想定されます。理工学部の真価が問われる時代ともなり、国立大学は大学院へのシフトが益々大事になるかと思われまます。AI化が叫ばれ、一部の授業の上手い教員以外は、お払い箱になる時代が来る、予備校はすでに来ているとも言われています。しかし、昔から授業の上手い先生と下手な先生は多くおられました。上手い先生の授業は人気が高く立ち見もいて、聞いていて自分も分かったような気分になりました。が、いざ試験を受けるとさっぱり点数が取れない経験を何回も繰り返した私にとって、やはり身近に寄り添ってくれる教員、実験実習でより実装してくれようとする教員とその教育システムこそが大学の本質ではないかと、その思いは今でも変わりません。本学も学部修士を通して教員が中心となってメンター性をうまく動かし、縦糸横糸をうまく張れば、その魅力度は益々若人に伝わると思います。

先生間の人脈、OBとの交流、そして共創情報学に見られるような大学の弾力的な進化などを通して、荒波の中で本学がますます発展されることを祈念して止みません。

まだまだ終わらない旅



ひと文化系領域（理工学基礎教育センター）
教授 クラウゼ小野 マルギット

時の経つのは早いものです。初めて日本の土を踏んでから、気が付けば40年以上になりました。異文化の中に暮らし、初めは背景の理解などに思いも及ばずあちこち頭をぶつけて痛い思いもしながら様々なことを経験してきました。そして多少は落ち着いたと思えるようになった今、停年の時を迎えました。

ドイツ語と異文化コミュニケーションとヨーロッパ語学研修。私が担当してきたものです。振り返れば、学生たちの顔と己の後悔と多少の自負とがない交ぜになり、複雑な思いに捕らわれます。

世界的趨勢には逆らえず、本学でも第二外国語は規模の縮小を余儀なくされ、その存続は今や風前の灯火なのかもしれません。それに抗うことは螻蛄の斧に等しい行為と思いつつ、やはり英語以外の言語を学ぶことの重要性を訴えなければという私の思いは今も変わりません。文科省がCEFR重視へと舵を切る前から、私たち第二外国語担当教員は全員で本学の言語教育の将来を見据えてその改革に取り組み、小さなものとはいえ一定の成果を残すことができました。

日本では今人口減少が進み様々な国からやって来た外国人労働者の数が増加しています。私の住む白老町にも数多くの外国人労働者が来ているはずですが、なかなか目にする機会はありませんし、交流という話もあまり聞くことはありません。人間を経済合理性だけで扱うことはできませんし、それは将来的に国や国民のためにもなりません。情けは人のためならず、と日本では言うでしょう。言葉を知ることが相手を理解するための一歩と

なり、互いに触れ合うことが社会の安定に貢献するのです。

また、今はネットで簡単に情報（何が情報なのかという問題がありますが）が得られる時代です。とはいえ日本語だけではあらゆるトピックにおいて限られた情報しか入手することは困難です。確かに英語で発信される情報は膨大です。日本語で足りなければ英語を加えれば良いと考える人が恐らく9割以上に達するでしょう。私は英語とフランス語を学び日々の暮らしの中で日本語を身に付けたドイツ人です。一つの事件やニュースなどについても、様々な言語で注意深く真偽を比較考量して行けば、一つの言語だけでは見えにくい多様な視点に出会いやすくなるのです。一見して複雑と見える状況にも楔を打ち込みその向こうを垣間見ることが可能となるのです。ネットの隆盛とともにネットの持つ危険性が指摘されるようになり、情報リテラシーとクリティカルシンキングの重要性が唱えられるようになりました。私も少ない時間の中で微力ながら学生たちにそれを伝えてきました。しっかりとそれを学ぶには、歴史学や人類学その他の学問領域の知見をも取り入れる必要があるでしょうが、現在のように限られた時間の中では容易なことではありません。とはいえ自分のためなので、自習に努め常にそのことに自覚的であってほしいと思います。

語学研修には思い出が色々あります。ずっと暖め続けてきたプランではありましたが、その実現に至るまでには長い時間が必要でした。契機となったのは、私が異文化トレーナー資格を得るためにドイツのイエーナ大学で

行われたセミナーに参加したことでした。現地で近郊の大学の情報を集めて実現の可能性を探ったところ、イェーナから遠くないワイマールにあるバウハウス大学ヴァイマルの担当者から受け入れ可能だと返答を得て語学研修プロジェクトの歯車は回転し始めたのです。日本に帰国して計画の細部を詰め、ポスター作りや説明会を開き参加学生を募りました。1回目の参加者は9名でした。午前中にドイツ語を学び、午後は大学や歴史地区、歴史的建造物などを訪ね、夜は向こうの大学の学生との交流、息抜きと刺激を求めてのベルリンへの小旅行などの日程を全て無事にこなして帰国しました。参加学生は、古き世代とは異なり相対的対象としてドイツを捕らえ、経験したようです。2回目も同じように計画しましたが、世相の変化でしょうか、どうやらドイツ語は魅力を失ってしまったようです。確かにドイツ語は副専門で短期間、その初歩しか授業で学ぶことはできません。学び続けたとしても役に立つかどうかは分かりません。ならば英語と考えるのは自然でしょう。英語の波、ますます高し、です。私としてはとにかく異文化を経験してほしいとの思いから、英語学習に切り替えて私のホームグラウンドでの語学研修の継続を図りました。現地での受け入れ態勢の変化など多少の紆余曲折はありましたが、コロナ騒ぎの前まで語学研修は続けられました。見方によっては英語とドイツ語の混在もまた良し、でしょう。

その副産物、ではありませんが、現地の大学との関係が深まるにつれて本学との提携話が持ち上がるようになり、ツヴィッカウ応用科学大学、ケムニッツ工科大学（現在は解消）、フライベルク工科大学と学術交流協定を結ぶことができました。これまで複数に上る学生たちが長期も含めドイツ留学を経験しています。学生のみなさんの選択肢・可能性の拡大に寄与できたのなら幸いです。

4月からは私の新たな日々が始まります。みなさんのように私もまだまだチャレンジ精神を忘れず色々なことに首を突っ込み日々を過ごしていきたいと思っています。

同僚や大学職員、組合の方々には大変お世話になりました。私はこの室工大で本当に人に恵まれたと思っています。色々な思い出が走馬灯のように蘇ります。人は来たり、人は去る。いよいよ私の番になりました。

最後に学生のみなさんへ。

今の「当たり前」はすぐに古び、当たり前ではなくなります。その「当たり前」に安住することなく、みなさ

んの知と感性のアンテナを「非・常識」にも向けておくことを希望します。多様性とは、異なるものの単なる混在ではありません。「非・常識」の理解への意欲を持ち続けてください。それは、人をつなぐしなやかで広い心を育ててくれるものだと私は信じています。

本学での思い出



しくみ解明系領域（システム理化学科）
准教授 安居光國

室蘭工業大学で37年間にわたり教育・研究そして社会貢献してきたことをふり返るのは退職の時ぐらいでしょう。とくに私にとって教育改善（FD活動）や体験実験などの企画には思い入れがとくにあります。

【理学部から工学部へ】

1987年に大阪大学理学研究科生理学専攻から本学に着任したときは、ほとんど周りには理学部出身者がいませんでした。これまでに医学部の文化は知っていても、工学部の文化に触れたときは大きな戸惑いがありました。とくに学科や大学でゴルフ大会が開かれていたことです。「より企業に近い分野だから」と強引に納得しました。またバイオ分野では大学の助手になることは狭き門のためポストクを数年務めるのが当たり前でしたが、当時の工学部ではMC修了で助手になれるのが普通でした。このほか、コピーは湿式、印刷は謄写版、卒論発表は模造紙をトンボに重ねるって、カルチャーショックは大きく、学科会議でつつい改善提案を言っていました。

【好熱菌とともに】

室蘭工大に赴任するにあたり研究テーマを何にするかをとても悩みました。それまでの殿村研究室の研究テーマは「筋肉タンパク質のアクチン・ミオシンの反応速度論」でした。竹内隆男教授から「君はバイオコースの第1号です。自由に研究してください。」と室蘭工大でバイオ研究をスタートさせる予算をいただきました。そして研究テーマを考えたのですが、北海道、室蘭市、鉄鋼ではバイオにつながらないため、登別市、温泉から、好熱菌の耐熱酵素に狙いをつけました。有珠山や登別温泉

の高温土壌から好熱菌を探すことから始め、固定化微生物からの耐熱アミラーゼ生産、活性酸素除去酵素（MnSOD）の遺伝子改変などに取り組みました。そして環境ブームに乗ってバイオマス分野が2本目の柱になりました。

【教育の世界へ】

コロラド大学での短期留学中に学んだ「研究をするには資金も人材も様々な方法で獲得しなければならない」を再認識して、2002年から本学の教育変換期の事業に関わりました。まずJABEE、技術者倫理教育そしてFD活動に取り組みました。とくに文部科学省の教育改革大型予算に次々とチャレンジしました。2006年に特色GP「オムニバス形式による技術者倫理教育の実践」が採択され、教育の新たな試みによって学生を育成することに魅力を感じました。そして就業力GPでは社会人基礎力を学生たちにつけさせたいと全学を巻き込んだ教育活動を進めました。また、インターンシップ先を倍増させることもできました。

こうした教育研究活動を約20年続けられた理由は「教育も研究である」と気づいたからでしょう。一方でFDワークショップを運営する上で「研究者の本質」が障害になることがありました。研究ではオリジナリティを重視する土壌があるため、教員独自の教授法に対しFDが教育方法を強要するものと誤解されたことです。そこで、参加者みんなで考えていこうという雰囲気を作ることに気を配りました。つまり研究者の本能に働きかけたのです。

人事

人事異動

国立大学法人
室蘭工業大学長発令

発令年月日	異動内容	氏名	現職
令和6年2月9日 令和6年2月29日	〈辞職〉	村田佳乃 山本匡汰	総務広報課係員(総務広報課) 施設課職員(施設係(設備担当))
令和6年2月7日	〈採用〉 大学院工学研究科博士研究員(しくみ解明系領域)	KOMMULA DILEEP	

学内会議

学内各種委員会等の開催

< 1月25日～2月24日 >

開催日時 令和6年2月1日(木)
会議名 第10回教育研究評議会

開催日時 令和6年2月1日(木)
会議名 第31回役員会

開催日時 令和6年2月13日(火)
会議名 役員会(臨時)

開催日時 令和6年2月14日(水)
会議名 第32回役員会

開催日時 令和6年2月14日(水)
会議名 第6回経営協議会

開催日時 令和6年2月15日(木)
会議名 第8回大学院工学研究科博士後期課程専攻長等会議

開催日時 令和6年2月20日(火)
会議名 第33回役員会

開催日時 令和6年2月22日(木)
会議名 経営協議会(臨時)

開催日時 令和6年2月22日(木)
会議名 第9回学長特命連絡会

学内行事

- 1月26日(金) 合格発表【2024年度4月入学 理工学部私費外国人留学生選抜】
- 2月8日(木) 令和5年度北海道工学教育協会研究集会
- 2月16日(金) 合格発表【2024年度10月入学 大学院博士後期課程CSC-muroranIT奨学金入試】
- 2月28日(水) START UP 2024 in 室蘭工業大学「室蘭から世界へ!」学内ベンチャー育成イベント

学外行事

- 2月8日(木) 国立大学協会令和5年度第2回政策研究所研究会(東京)
- 2月10日(土) 室蘭工業大学同窓会新年交礼会(札幌)
- 2月13日(火) 令和5年度第3回国大協北海道地区支部会議(オンライン)
- 2月15日(木) 2023年度留学生交流推進懇談会・留学生交流会(室蘭)
- 2月19日(月) 室蘭工業大学MONOづくりみらい共創機構「機構創立記念シンポジウム」記念式典・フォーラム(札幌)
- 2月19日(月) 令和5年度北海道科学技術奨励賞贈呈式(札幌)
- 2月23日(金) 「Startup Weekend 伊達」(室蘭工業大学SIP)(伊達)

編集後記

◆ この記事を執筆している2月末～3月初頭は大学にとっては学位記授与式や、合格発表、入学式準備など何十年も続いてきた行事が目白押しです。今年の合格発表ですが、掲示板の前には誰もいなかったそうです。デジタル化の流れの中で、合格発表時の胴上げといった風物詩も見れなくなると思うと寂しくも思います。利便性を考えれば大変喜ばしい変化であるとおもいます。DX化は電子化だけでなく、考え方のトランスフォーメーションも必要なのだと改めてかみしめる毎日です。



(Garoon：総務広報課総務広報係、E-mail：koho@muroran-it.ac.jp)

(総務広報課総務広報係)



室蘭工業大学のキャラクター「ムロびょん」

■編集発行 室蘭工業大学総務広報課
〒050-8585 室蘭市水元町27番1号 電話 0143-46-5014

■印刷所 株式会社日光印刷
電話 0143-47-8308